創世ホール通信 No. 325

催し案内＋文化ジャーナル
2023年1月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

創世ホール名画鑑賞会Vol.36
とんび

日時：令和5年1月21日(土)
　　① 午前10時30分／②午後2時
会場：3階　多目的ホール

©2022「とんび」製作委員会

入場料：大学生・一般　前売1,000円(当日1,300円)
　　小・中・高　前売り当日共1,000円
　　シニア(60歳以上)前売り当日共1,000円
上映作品：『とんび』
　　(2022年・日本・139分)
出演▼阿部寛、北村匠海、杏、安田顕、大島優子ほか
監督▼瀬々敬久
原案▼重松清「とんび」(角川文庫刊)

主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会
　　(問い合わせ：088-698-1100)

北島町立図書館・創世ホール文化講演会
海野十三先生◎生誕125周年記念特別企画
大森望◎講演会

「海野十三、小松左京から『三体』　ー現代SF最前線ー」
日時▼令和5年2月12日(日)
　　14時30分～16時（14時開場）
会場▼3階多目的ホール　入場無料
講師▼大森望（おおもり・のぞみ）氏

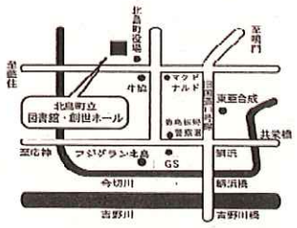
＊1961年高知市生まれ。
京都大学文学部卒業後、
新潮社入社。
その後退職しフリーとなり、
様々な編集で多くの賞を受賞。
話題作「三体」三部作の共訳
も手がけている。

内容▼SF小説紹介の第一人者として永く第一線で活躍中の翻訳家・評論家の大森望氏をお招きし、世界SFの最前線について講演をしていただきます。

主催▼北島町立図書館・創世ホール

※創世ホールに来場される方へ※

▼入場される方には、マスクの着用と手指のアルコール消毒をお願いいたします。
▼観客同士の距離を一定の間に保つため、3階多目的ホールの座席数を減らしております。(前後左右を1席空けてお座りいただくようにしております)



■なお、今後の感染症拡大状況に応じて、対応を変更することがあります。ご迷惑をおかけしまして恐れ入りますが、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

ＳＦ特撮研究家・池田憲章さんを偲ぶ●小西昌幸

■北島町立図書館・創世ホールと深く関わりがあった池田憲章さん（ＳＦ特撮研究家）がお亡くなりになった（2022年10月17日ご逝去。享年67）。まず、簡単に池田さんの経歴を記しておく。下記は、2011年２月27日に当館が開催した氏の講演会「脚本家・金城哲夫～特撮とドラマを初めて融合させた人」のチラシや当日パンフレットに使用したものの再録である。

いけだ・のりあき◆ＳＦ特撮研究家、日本ＳＦ作家クラブ会員、フリーライター、編集者◆1955年１月14日埼玉県所沢市生まれ◆駒沢大学文学部卒◆学生時代から特撮・アニメ関係のフリー編集者＆ライターとして活動。映像や少年雑誌、コミックも含めた総合的な日本ＳＦ史作成がその夢で、海野十三、戦後のＳＦ少年小説、ＳＦイラストの小松崎茂、円谷英二の東宝特撮映画、ＳＦテレビなどがその研究領域である◆『海野十三全集』（三一書房）で編集委員を務め、主に戦後作品の発掘にあたった。その縁で海野十三の会（徳島）と交流があり1999年には当地で講演し好評を博した。また2007年２月に北島町創世ホールの講演会「故郷は地球～脚本家・佐々木守がめざしたもの」で講師を務め全国的反響を巻き起こした◆1988年、『アニメック』誌連載の「ＳＦヒーロー列伝」により「星雲賞（ノンフィクション部門）」受賞◆主な編著書に『ＳＦＸの秘密』（廣済堂出版）、『ＮＨＫ連続人形劇のすべて』（アスキー、共著）、『アニメ大好き！』（徳間書店、共著）、『円谷英二の映像世界』（実業之日本社、共著）、『ウルトラマンvs仮面ライダー』（文春文庫、共著）など多数◆2010年から特撮リボルテック（ケン・エレファント）で勤務。広報宣伝を担当◆近年、インターネットラジオ「談話室オヤカタ」（毎週水曜日）でマニアックかつ元気なトークを展開。同番組は2011年２月末で293回を迎え、円熟期の代表的仕事になりつつある◆埼玉県所沢市在住。

■池田さんとは1990年代の終わりに交流を持った。私が編集した『ＪＵ通信・復刻版』（1998年５月17日、海野十三の会発行、先鋭疾風社発売）をご覧になって、ある日電話がかかってきたのだ。とてもよく通る声の人で、会話が途切れない。初めての電話だったが20分ぐらい話していた。

■直接お会いしたのは徳島市内だった。彼が徳島にやってきて、海野十三ゆかりの場所をご案内し、海野十三の会の山下博之会長（当時）と私がインタヴューをした。それは、海野十三に関するもので、その詳細は、「海野十三研究に関する新局面」と題して「文化ジャーナル」1999年２月号～５月号、７月号～９月号に掲載している。インタヴューをした場所はアミコビルのホテル東急イン（当時）のレストランだった。彼は学年でいうと私より一つ上であり、ほぼ同世代なので共通の話題も多く、気があった。「ウルトラＱ」などのほかに、私は「俺は用心棒」や「傷だらけの天使」や「早春スケッチブック」や「ムーミン」が好きなのだと話すと、よく分かりますよと、うなずいてくれた。

■以後、頻繁に連絡を取り合うようになり、上京時にはよく会った。世田谷区若林の海野十三邸を一緒に訪問してご健在だった佐野英さん（海野夫人）に会ったり、大伴昌司さんのご母堂に会ったり、東京創元社を訪ねたり、出版芸術社の原田裕さんのところにもよく行った。海野十三さんが神戸一中（現神戸高校）の交友会誌に数本文章を寄せているので、その調査に二人で神戸高校資料室を訪問したこともある。

■2000年代の我々の交流の成果の一つは、『海野十三メモリアル・ブック』（2000年５月17日、海野十三の会発行、先鋭疾風社発売）に結実している。

■そして、創世ホール関係では、竹内博さんの講演会（「３人の怪獣王～円谷英二、香山滋、大伴昌司」、2003年３月23日）とご自身の二つの講演会（佐々木守さん、金城哲夫さん）が挙げられる。また「文化ジャーナル」には、彼の寄稿してくれた文章をかなり多く掲載している。海野十三関係の寄稿文やインタヴュー、二人で行なった四至本アイさん（大伴昌司ご母堂）インタヴューほか、小松崎茂さん、水谷隼さん、佐々木守さんの追悼文等だ。もちろん、二つの講演会の詳細は、テープおこしをして、長期連載している。

■池田さんは、北島町立図書館・創世ホールが紀田順一郎さんや種村季弘さんや山前譲さんや柴野拓美さんや長谷邦夫さんや木部与巴仁さんや辻真先さんの講演会をしていることに拍手してくれた。そして彼の講演（「故郷は地球～脚本家・佐々木守がめざしたもの」）抄録が掲載された「徳島新聞」文化面記事は伝説になった。当該採録原稿をすすり泣きながら書いたとおぼしい沢口佳昭記者（当時文化部）は、今、論説委員になっておられる。キューテレビの映像記録もある。それらの中に池田憲章さんは生きている。

■池田さんは、調子のよいときにはひんぱんに電話をかけてきた。そのときに、物凄く重要なことを話したりする。例えば、テレビの座頭市シリーズで、新藤兼人さんが脚本を書いていたりして驚いた、勝新太郎さんは立派な映画人ですね―などと私が話すと、その２段階ぐらい上からの返答（しかも斜め上からの返答）が間髪入れずに繰り出されたりする。あとは、ため息をつきながら、池田さんのお話を拝聴するしかない。録音しておけばよかったと思うこともあった。それで、ある時期からお会いするときに会話を録音させていただくようになった。世田谷文学館でＳＦ展があったときに、二人で出かけて、同館の喫茶室でインタヴューしたこともあった。

■池田さんは、2010年代半ばに脳梗塞で入院された。退院後、東久留米市のアパートに一人で住んで、時々ヘルパーさんが訪問して下さっているようだった。その頃、私の次男一家が国分寺駅北口から２分の場所に住んでいて、国分寺駅から東久留米駅までは西武線で20分ぐらいだったので、私はお見舞いを兼ねてお邪魔することにした。ちょうど訪問時間が昼食時に重なる見通しだったので、あらかじめ、二人分のサンドイッチと飲み物などを購入して出かけることにした。駅から歩いて15分から20分ぐらいの静かな場所にアパートはあり、そこの１階に、彼は、いた。会って話す内に、一緒にサンドイッチをほおばるような状態ではないことに気づかされた。彼は脳梗塞の後遺症のため、歩行が困難で、歩行器を使って移動していた。また、ものを飲み下す能力（嚥下能力）にも支障をきたしており、そのため食事はチューブに入った流動食が基本なのだった。口中の唾液を飲み込むことにも問題があり、足元にゴミ箱を置いて会話の間に、たまった唾をティッシュと共に、下に落としていた。

■胸が締め付けられる思いがしたが、私は平然を装い、表情には出さないように努めた。後遺症は残っているものの、会話には殆ど影響はなかった。そして造詣の深さも、素早い頭の回転も、以前と同様だった。持参したサンドイッチは私が食べるわけにはいかないので、全て冷蔵庫に入れた。あとで聞くと、ちゃんと食べることが出来たよ、とのことだった。

■北島町は（そして海野十三の会は、あるいは小西昌幸は）池田さんに数々の恩義がある。今、困っている彼に対して、果たして私に何ができるだろうかと深刻に受け止め、考えながら、帰路についた。年に一度は次男一家の様子をみるために、東京の国分寺界隈に出てくるので、アパートを訪問し、何か二つか三つ話題を振って90分ぐらいの滞在時間の会話を録音しておこうと考えた。私にはそんなことぐらいしか思いつかなかった。確かこの時期の会話で印象に残っているのは、「伊福部昭映画音楽全集」のボックス・セットが出た頃で、池田さんはこれに関わっていたので、その解説の原稿料か何か（監修料？）が少し振り込まれたんだということだった。

■この、ご体調を悪くされていた時期に、同じ東久留米市内に聖咲奇さんがおられたことはとても良かったと思う。古い友人の一人である聖さんが週に一回程度、池田さんの様子を見に行ってくれていたと思う。私が池田さん宅を訪問するときは聖さんも同席されて、二人で駅まで向かう道すがら、彼（聖さん）が元天井桟敷の方だったことを知り、ビックリしたこともあった。退院後に聖さんが車椅子を押して、日本ＳＦ大会に参加したこともあるようだ。

■池田さんには、たくさんの雑誌発表原稿などがあったのだが、単行文化については、あまり熱心ではなかったようだ。もったいないと思う。恐らく今ご自分にとって興味のあることが常に一番の関心事なので、過去の仕事には頓着しないようなタイプではないかと思った。だが、それを単行本の形で、読みたいと願う読者は確実にたくさんいるのだ。そして単行本にしておけば、うまくゆけば文庫化された時に少しでも印税収入がある。

■池田さんの単独仕事の最後の雑誌連載は、おそらく『コミック・リュウ』の「実相寺昭雄を追って」ではないか。連載自体は未完のままだったが、優に単行本になるだけの文章と図版の量はあるはずだ。ご本人からしたらご不満なのかもしれないが、十分読み応えのある興味深い内容だった。一度、面と向かって彼に、その話をしたことがある。その時話してくれたのは、実相寺昭雄監督のご臨終の情景のことだった。危篤状態になり、仲間が駆けつけて「実相寺、死ぬな」と声をかける。そして、奥さんが今病院に駆けつけているところなのだから、せめてそれまでは死んではだめだぞと言い、皆が手をさすったり、足をさすったりしたのだそうだ。池田さんは、実相寺さんのことをまとめるときには、その部分の記述を欠かしてはいけないんだ、という趣旨のことをポツリと言った。

■その壮絶な情景を教えられて、息を呑むしかなかったが、その部分を付け加えて池田さんが単行本にする手も十分あったのではないかと私は思う。とにかく、振り返ってみれば惜しい仕事が、山のように彼にはあった。

■一緒に歩いていて、革靴の底が外れているのを目撃したことがあった。徳島市の宿舎でチェックイン手続きをするのに、予約の券（宿泊パッケージセットの航空機の券）がなかなか出てこないこともあった。講演会に備えて、膨大な資料をカバンに入れているので、その紙資料に紛れて探索するのに15分もかかったのだ。彼にはマネージャーがいたらよかったと思う。だけどそのためには収入確保が大切だった。改めてフリーの物書きの人たちの晩年を思い、私はため息をつく。

■結局、一緒にやろうとしていた『海野十三読本』は手つかずのままだ。

■池田さんは、最近は、写真資料などを整理していて、これはと思う友人にレターパックに仕分けして送っていた。私には「京都買います」のスチール写真が送られてきた。なぜか怪獣倶楽部同窓会のような写真も。

■最後に会ったのは、2019年２月のときだったと思う。いつものようにアパートに出かけて話をした。最後に電話で話したのはその年の10月だ。当時、保護司会の関係で上京する機会があり、また遊びに伺いますと手紙を書いてあったら「今回はちょっと都合が悪いので、申し訳ないけど次の機会に」とお電話があった。それが最後だった。心配になり、聖さんに電話をかけたら、聖さんもご入院中だった。これはいけないと思い、電話をやめた。そしてそれっきりになった。私は悔やんでばかりだ。

■残念ながら、紙幅の関係で、創世ホール講演会にまつわるたくさんの思い出や裏話や写真などは、今回掲載できなかった。他の機会に譲りたい。

■池田さん、今年は海野十三先生の生誕125周年なんですよ。そして、あなたには伝えられませんでしたが、この２月12日に大森望さんの講演会を創世ホールでやることになったのですよ。その催しは天国の海野十三先生や小松左京さんや、創世ホールとゆかりのある柴野拓美先生と共に、池田さん、あなたに捧げる催しになりました。当日、会場の片隅にぜひ来てくださいね。（2023・01・07脱稿、文責＝元北島町立図書館・創世ホール館長小西昌幸）